最優秀賞

【学校経営・総合的な学習】

探究的な学びを通して、次代を創る子供たちの資質・能力の育成

静岡県浜松市立細江中学校
山田 達夫（やまだ たつお）

1 はじめに

浜名湖北部の奥浜名湖のほとりに位置する浜松市北区細江町は、都田川と井伊谷川の三角州に田園が広がる。江戸時代には、姫街道や気賀関所など交通の要所として栄え、古くは、い草の栽培も盛んに行われていたが、今は丘陵斜面を利用したみかん栽培が盛んである。NHK大河ドラマ「女城主 井伊直虎」の舞台となり、注目を浴びた。近年、この地域では、少子高齢化や若者の流出等による後継者不足、地元商店街の商店の減少等により地域の活性化が課題となっている。

2 問題の所在

(1) 生徒の実態

本校の生徒は、素直で穏やかな生徒が多く、学校行事や部活動、ボランティア活動等に積極的である。その反面、自ら考え意思決定することや、自信のなさから自己肯定感がもてず、受動的で自ら行動を起こすことが苦手な面もみられる。また、全国学力・学習状況調査からは、次のような課題も明らかになった。

「将来の夢や目標を持っていますか」に対して、肯定的な回答（当てはまる・どちらかというと当てはまる）をした生徒は、65.8％（R1：全国70.5％）であった。また、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」に対して、肯定的な回答をした生徒は、33.2％（R1：全国39.4％）であった。共に全国平均を下回った。

高校入試を目前にした3年生全員に対して校長面接を行った際に、素直さや真面目さ、優しさを感じる一方、自信のなさや自己表現、将来の希望等に物足りなさを感じることがあった。特に、ふるさとのよさや課題など地域についての思いを語る生徒は少なかった。これは、地域及び地域の人とのかかわりが学びや生活の中で少なくなっていることに因ると考えられる。つまり、学校や学びがこの地域での実生活や実社会と十分につながっていないと考えた。

(2) 今、学校に求められているもの

来年度、中学校は新学習指導要領の全面実施を迎え、その「前文」では、これからの学校には、多様な人々と協働しながら、持続可能な社会の創り手の育成が求められると述べられている。また、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携及び協働による社会に開かれた教育課程の実現が重要とされている。

そして、中学校学習指導要領解説（平成29年告示）の総合的な学習の時間編で、総合的な学習の時間は、探究的な学習や協働的な学習とす

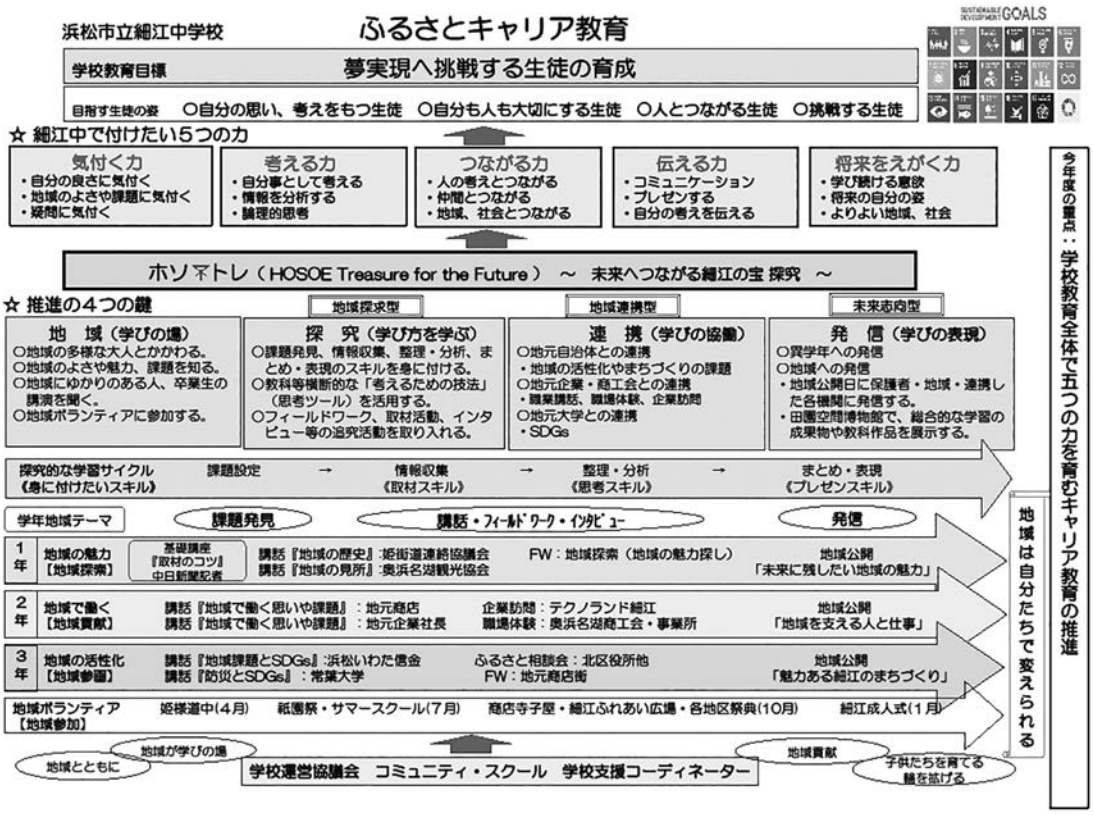
ることが重要であり、特に、①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現の探究のプロセスを繰り返していくことを重視している。

3 研究の目的

本研究は、育成したい資質・能力を明確にし、生徒たちが細江地域のよさや願い、課題に気付き、自分事として主体的にその解決に取り組むことを通して、自己肯定感の向上及びふるさとへの愛着と誇りの育成を図ること、また自分たちが未来を創る担い手としての意識の向上を目的とした。そのために、３年間の探究的なサイクルの学習プログラムを確立すること、生徒の学びが将来及び地域とつながるよう持続可能な地域との連携・協働の体制づくりを目標とした。

4 学校経営の視点から

これからの社会や教育を見据え、生徒の学びが実生活や実社会とつながり、将来の自己の生き方を考える「キャリア教育」を全教育活動を通して推進することにした。特に、総合的な学習の時間を「ホソ・トレ」（HOSOE Treasure for the Future 未来へつながる細江の宝 探究）と称し、細江地域を学びのフィールドとする探究的な学習に取り組む「ふるさとキャリア教育」を構想した（資料1）。そこで、目の前の生徒の実態及び地域の課題を踏まえること、次代を担うために必要な資質・能力とは何かを明確にすること、教科等横断的で体系的な教育課程のもと、学校が



資料1　ふるさとキャリア教育構想図

チームとして組織的に機能することを目指した。

(1) 育てたい5つの力の明示

生徒の実態を踏まえ、細江中で育てたい5つの力（気付く力・考える力・つながる力・伝える力・将来をえがく力）として明示し、学校経営目標に位置付けた。これは、自ら気付き、自分事として考え、人とつながりながら、自分の考えや思いを伝え、未来に向かって行動を起こすことを願い設定した。

(2) 地域課題の探究

学校と社会をつなぐ最も身近なフィールドは地域である。地域には、教育資源が豊富にあり、地域を盛り上げようと活動している大人が多数いる。そうした大人との出会いを通して、多様な価値観や生き方を学ぶ機会とするとともに、地域課題を探究する学びの場とした。生徒の学びを豊かにするためには、社会との連携と協働が欠かせない。そのため、校長として、地域の関係機関に足を運び、学校経営ビジョンを伝え、授業への参加や生徒の受け入れについて、将来の地域を担う人材育成の観点から協力要請をした。

そして、発達段階に応じた各学年のテーマ・探究課題を次のように設定した（資料2）。

	学年テーマ	探　究　課　題
1年	地域を見つめる【地域探索】	地域のよさや自慢を見つけ、未来に残したい地域の魅力を探る
2年	地域を支える【地域貢献】	地域で営む人々の思いや願いに気付き、仕事の魅力を探る
3年	地域を創る【地域参画】	地域のよさや課題に気付き、魅力ある未来の細江を探る

資料2　学年テーマと探究課題

(3) 組織的に取り組む学校体制

学校経営の重点を「学校教育全体で5つの力を育むキャリア教育の推進」とし、全教職員の共通理解のもと、学校体制で取り組む環境を整えた。キャリア教育推進教師（総合的な学習の時間主任）と各学年のキャリア教育（総合的な学習の時間）担当で構成する「キャリア教育推進室」を校務分掌に新たに位置付け、各学年の進捗状況の確認や計画の見直し及び修正を定期的に検討している。また今年度、本校はコミュニティ・スクールを立ち上げた（資料3）。学校運営協議会を活用して地域社会との連携及び協働を図ることで、社会に開かれた教育課程の実現を目指している。

資料3　学校運営協議会

5 具体的な取組

課題解決型の探究的な学習が、これからの時代を生きる力を育むとされ、新学習指導要領では、探究的な学習をより一層充実させることを打ち出している。

そこで、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現という探究的な学習の過程を総合的な学習の時間を中心に体験的に学ぶことにした。まず、生徒たちが、今後の学習のねらいと見通しをもてるように、ガイダンスと探究計画の立案に取り組んだ。

総合的な学習の時間のスタートにあたって、地域課題をテーマにした探究的な学習を進めていくガイダンスを行った（資料4）。今後の活動の流れを、生徒たちに次のように示した。

①課題設定：地域をテーマに、自分の興味や関心から探究する課題を設定する。

②調査活動＆フィールドワーク：地域をフィールドに、商店街や企業、区役所、大学、地域の方々と連携して情報を収集する。

③整理・分析：フィールドワークで集めた情報を整理したり、分析したり、分類したり、関連さ

せたりして課題解決に向けた考えを形成する。

④まとめ・表現：課題を解決するための提案を行う。

また、「ホソ・トレ」探究計画の立案では、３年生の共通探究テーマを『細江の町をもっと魅力的な町にしよう』とし、グループテーマ、テーマ設定の理由、探究活動で調べること・明らかにすること・提案することなど探究計画の具体を立てていった（資料５）。

資料4　ガイダンス資料

資料5　探究計画書

（1）主体的な学びにつながる課題の設定

課題設定は、生徒の主体的な学びにとって、極めて重要である。生徒自身が取り組むべき課題を見いだすことで、活動への意欲が高まるため、地域の様々な関係機関と連携した取組を行った。

①　SDGs（持続可能な開発目標）の視点から学ぶ地域課題＜地元企業・大学との連携＞

SDGsを推進する大学や企業からSDGsの基本的なことを学ぶことで、地域の課題は世界の課題でもあることに気付き、探究活動の視点となった。浜松いわた信用金庫SDGs推進部からは、「SDGsって何」という基本的な知識とともに、地域課題をSDGsの視点から学んだ（資料６）。また、常葉大学准教授とゼミ生からは、地域防災とSDGsについて学んだ（資料７）。

SDGs視点の課題設定を学ぶ

細江中生

浜松市北区細江町の市立細江中はこのほど、浜松いわた信用金庫SDGs企画課の竹内課長を講師に招き、特別授業「SDGsとは？地域とつながる地域が世界につながっている」を実施した。

地域の独自の素材や活動を取り上げ、各団体と協力しながら課題解決に取り組む同校の総合的な学習「ホソトレ」の一環。3年生約160人が、国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGs）の視点からの課題設定方法を学んだ。

竹内課長は「地域に貢献することはどういうことかを考えることがSDGsになる。自分のできることは何かを見つけよう」と説明。生徒はグループ討論も交えて理解を深めた。

グループで話し合い理解を深める生徒＝浜松市北区細江町

資料6　SDGs学習の新聞記事

資料7　防災とSDGs

②　行政から学ぶ地域課題

＜地元自治体との連携＞

浜松市北区役所(区振興課、まちづくり推進課、長寿保険課等）の担当者から、まちづくりの現状と課題について話を聞く、ふるさと相談会を実施した。防災、産業、観光、福祉等の分野に分かれて自分の探究テーマに関する質疑応答を行った（資料８）。

資料8　ふるさと相談会

③　地元商店街・商工会から学ぶ地域課題
＜地元商店街・商工会との連携＞

地域人・職業人としての生き方や仕事を通しての地域とのかかわり、願いや課題について学んだ。若い後継者は、新しい時代にふさわしい価値観をもち、地域や社会を支える活動をしており、生徒たちのロールモデルとなった（資料9）。

資料9　若手後継者からの講話

（2）現地調査を中心とした情報収集

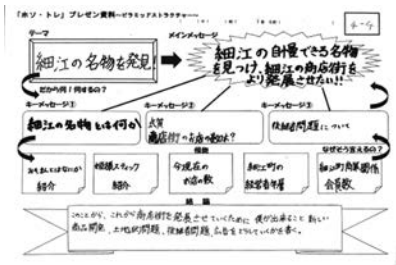
情報収集のスキルを学ぶため、地元新聞記者から「取材のコツ」の話を聞き、情報の集め方や情報の整理のポイントを学んだ。また、フィールドワークやインタビューのポイントを学び、現地調査を行った（資料10）。訪問先は、自分たちで決め、事前に連絡を取った。緊張した様子で、訪問のねらいや日程調整など訪問先へ連絡を取る体験は貴重なものとなった。

資料10　商店でのフィールドワーク

（3）思考ツールを活用した整理・分析

黒上晴夫関西大学教授による探究的な学習に関する校内研修をオンラインで実施し、探究的な学習の意義や思考ツールの活用について職員の理解が深まった。そして、収集した情報を比較する、分類する、関連付けるなどの考えるための技法として思考ツールを活用している（資料11、12）。思考ツールを活用した整理・分析を通して、生徒たちは多様な考えを交流し合い、考えを深めていった。

資料11　思考ツールを使ったグループワーク



資料12　ピラミッドストラクチャー

（4）地域への発信を目指したまとめ・表現

本校では、総合的な学習の時間の「まとめ・

表現」の場を、ホソ・フェス（HOSOE Festival）と名付け、地域に公開している（資料13）。友達や他学年、保護者といった内への発信はもとより、地域社会など外への発信により、評価やアドバイスをもらうことで、自信や意欲につながると考えた。10月に行われたホソ・フェスでは、３年生の探究的な学習の成果を1、2年生、保護者、ホソ・トレにかかわった方々、そして地域に向けて発表した。

第１部は代表グループを除く38グループが各教室に分かれて、フリップ形式発表を行い、１、２年生及び保護者、地域の方が参加して、ルーブリック評価表を活用した評価をしていただいた（資料14）。

第２部は３年代表の２グループがプレゼンテーション発表を行った（資料15）。それぞれのグループの発表に対して、これまでの探究活動にかかわっていただいた方から評価をいただいた（資料16）。代表グループ①は「災害に強い細江町にするために」をテーマに発表した。細江地区の住民に防災への関心をもってもらい、防災対策を強化し、防災に強いまちづくりを提案した。そのための新しい対策として、「防災カード」をつくり、各家庭での防災グッズの完備とともに地元商店の活性化を提案した（資料17）。

資料13　第１部　グループ発表

細江中学校　2020　総合的な学習の時間「ホソ・トレ」　細江の宝　Hosoe treasure　　ルーブリック評価

(1)次の1～5の項目について、発表グループが現在到達していると考えるレベル段階に大きな○をつけてください。「レベル1」に至らない場合は、準備レベル欄に○をつけてください。

レベル	考える力		気付く力		つながる力		伝える力		未来をえがく力	
	A ①シンキングツール活用 ②論理的思考 ③課題解決力	B ①より良くするために批判的に思考する ②発想する	C ①地域の課題を見つける ②自分の進路に関わる分野の課題を見つける	D ①自分の強みを見つける ②自らの課題を見つける ③自信をつける	E ①仲間・地域とつながる ②考えと考えをつなぐ	F ①行政・大学とつながる ②世界とつながる ③発信する	G ①プレゼンテーション能力 ②コミュニケーション能力 ③ストーリー構成力	H ①記述力 ②聞く力 ③メモ・ノートを取る力	I ①向上心 ②学ぶ意欲 ③価値を学ぶ	J ①計画性 ②実行力
準備レベ										
1	自分の意見をもとうとしている。		地域の課題について考えている。		地域の方とつながりながら、探究している。		発表の際、原稿を読んで伝えている。		前向きな態度や姿勢で発表にのぞんでいる。	
2	5W1Hによって、自分の意見をもとうとしている。		地域の課題について、自分の問題として考えている。		周囲に自分の得た情報を伝え、地域の役に立ちたいという思いが伝わる発表であるか。		発表の際、原稿を見ないで、明るい表情で、聞き手の目を見て、適切な表現で伝えている。		「社会で活躍する自分」になるために、ホソ・トレに積極的に参加している。	
3	様々な情報の内容を比較し、根拠をもとに、自分の意見を考えている。		地域の未来や課題につい独創的な解決策を考え、提案している。		仲間と楽しみながら課題を解決しようとしている。また、SDGsを考えて、行政や企業の方々に質問し、主体的に情報収集しいる。(フィールドワークに出ている)		発表の際、原稿を見ないで、明るい表情で、相手の反応を見ながら、分かりやすく伝えている。		地域には、何が足りないのか課題に気付き、自分たちの活動を修正し、コントロールしている。	
4	課題解決のために、共通点や相違点を指摘しながら、根拠を示して説明する力がある。		地域や企業の人々・大学や行政の方と関わる中で、地域に誇りをもち、自分にも自信をもっている。		目標達成のために、多様な考えや多角的な視点をもち、チームをこえて、学級や学年にも働きかけた提案である。		プレゼンテーションにストーリーがあり、巧みな話術(ジェスチャー・声の表現・アイコンタクトなど)で内容を伝え、質問にも誠実に答えている。		活動を面白がったり、楽しんだりすることができる。地域を自分たちの手で変えるチェンジメーカーとしての熱意が感じられる。	

(　　)年(　　)組(　　)番　名前(　　)

発表を聞いて感想・疑問・質問を書きましょう。

画用紙に抽象的に記して、口でだらだら言わずに、でも必要な部分を具体的に説明していて、内容がとても理解しやすかった。また、字と絵のバランスもよく、パッと見た感じで中身を理解しやすかった。地域の方の意見をききに行ったり、SDGsを考えてその中からつなげて細江がよりよくなるために、何をしたいか、何ができるか、どのくらいできるのかなど、質問して事実と自分たちの考えを混ぜ、実現できることを考えていて、「ぜひ私たちもやってみたい」と思った。

資料14　1年生のルーブリック評価表

資料15　第２部　代表グループ発表

資料16　第２部　コメンテーターからの評価

資料17　代表発表①「防災」

代表グループ②は「若い人にみそまんを発信しよう」をテーマに発表した（資料18）。細江町自慢の食べ物であるみそまんを広く発信していけば、地域の活性化につながると考えた。そのための提案の一つが、SNSを活用した情報発信である。若い世代をターゲットにみそまんと合わせて、地域の景色、自然、歴史のスポットなど若者受けするところをPRしていくものである。２点目の提案は「withみそまんプロジェクト」である。フィールドワーク先の商店の地産地消をヒントに、みそまんの材料となる小豆を町内の幼稚園、小中学校で育て、その小豆を材料に商店でみそまんをつくってもらい、給食で食べるという提案である。小さい頃にみそまんの味を覚え、思い出に残ることで、世代を超えて広くみそまんに関心をもってもらえるという発想である。

最後に、浜松市北区長から代表グループの発表に対して、地域にゆかりのある「直虎賞」、「竜宮小僧賞」の表彰をしていただいた（資料19）。

北区役所は地域の活性化や新たな魅力の創出につなげるため、職員にアイデアを募集する「直虎レガシー伝承事業」に取り組んでいる。今回の企画は、魅力ある未来の細江を探究し、提案する本校の「ふるさとキャリア教育」とのコラボレーションに因るものである。

資料18　代表発表②「みそまん」

資料19　北区長から表彰

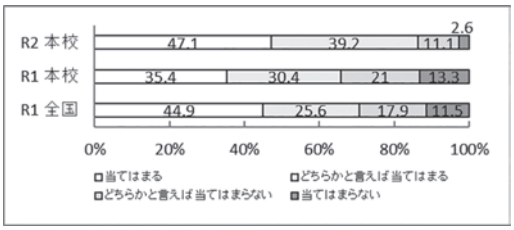
6　成果と課題

(1)　エビデンスからみえる成果（今年度の数値は、校内で全国学力・学習状況調査と同じ質問項目で実施したものである。）

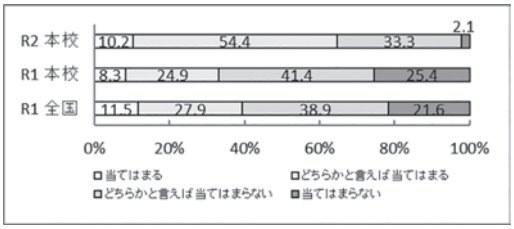
①　全国学力・学習状況調査からの考察

ア「将来の夢や目標を持っていますか」に対し

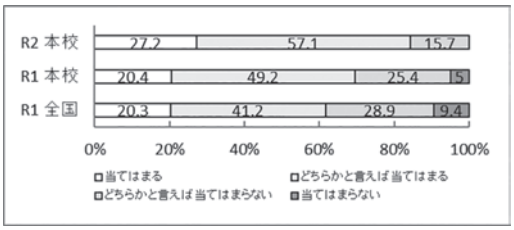
て、肯定的な回答をした生徒は、65.8％（R1）→86.3％（R2）と約20ポイント上昇した。身近な地域の大人と出会うことで、あこがれや多様な価値観・生き方に触れ、将来を考えるきっかけとなったと考えられる。



イ「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」に対して、肯定的な回答をした生徒は、33.2％（R1）→64.6％（R2）と約31ポイント大きく上昇した。地域課題解決型学習の取組を通して、地域への関心の高まりとともに、「自分事」として何ができるかまで探究したことに因ると考えられる。

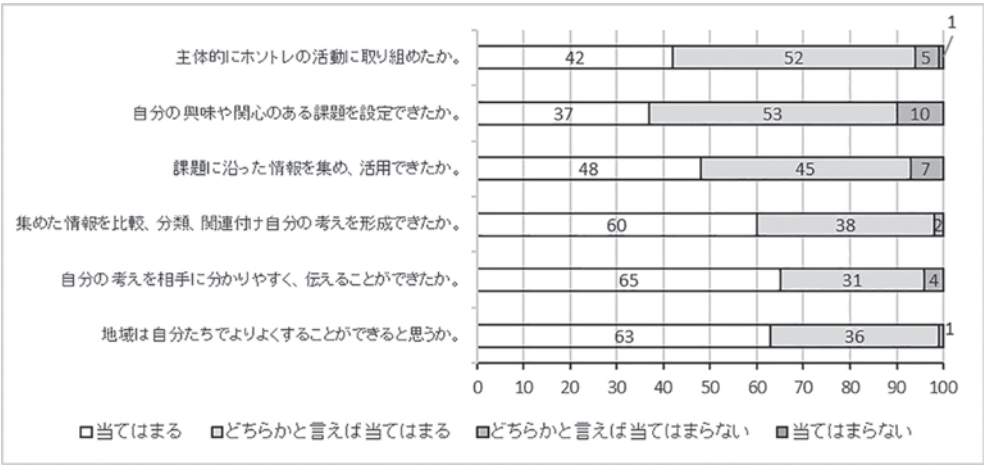


ウ「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか」に対して、肯定的な回答をした生徒は、69.6％（R1）→84.3％（R2）と約14ポイント上昇した。探究的な学習の過程を生徒自身が意識的に使うことができるようになってきたことの表れと考えられる。



② 探究的な学びに関するアンケート結果からの考察（３年生徒：147人）（資料20）

全体的に生徒による自己評価は高かった。探究的な学習を通して、生徒の主体性を育てたいという思いがある。自分の興味や関心のある課題設定が、ホソ・トレの活動に主体的に取り組めた大きな要因だと考えられる。また、「地域は自分たちで変えられる」をテーマに取り組んできたが、地域をさらによくしたいという思いが育ってきていることは確かである。



資料20　生徒アンケート結果

(2) 生徒の授業の振り返りからみえる成果

資料21は、３年生の「細江らしい食べ物を追求しよう」をテーマに探究活動に取り組んできたグループのある生徒の活動を振り返った感想である。この文章を読むと、自ら考えたタイトル「未来を創る」が未来志向になっており、夢や希望をもつことにつながっていることや、また、質問やアイデアをもって臨んだフィールドワークで地域の大人との本物の対話を通して、大人の多様な価値観に触れたことが分かる。さらに、学びが未来に向かっており、自分たちが未来を創る担い手だという意識が芽生え始めている。

(3) 地域からの評価

① 探究的な学びに関するアンケートからの考察（保護者・地域：74人）（資料22、23）

未来を創る

「サイズを変えたらいいんじゃない。」

毎週水曜日のホソトレは、地域について考える時間となっている。私たち三人は、「細江町らしい食べ物を追求しよう」をテーマに班を作った。その日は、名物である「みそまん」をより良くするための新しいアイディアを出し合い、最終的に一致したのが、サイズを変えることだった。サイズを小さくすれば、子供にも食べやすく、高すぎない値段で貰えるのではないかという理由からだった。そして翌週、地域の方々の声を聞くためのフィールドワーク先を決めることになった。伺いたい場所はいくつもあったが、新型コロナの影響で、みそまんを扱う四店舗を訪問することにした。

そして当日、お店の方が、笑顔で出迎えてくださった。今でも、あの優しい笑顔が私をも笑顔にしたことは忘れない。そして、その笑顔が私の大きな責任と目標になっていくとも。店内を案内してもらいながら、いくつかの質問を重ねてきたが、最後の質問は、一番必要としていたものだった。

「私たちが考えたみそまんの改良案やアイディア商品についてどう思われていますか。」

私たちがやろうとしていることを、お店側は、どう思われているのかということだが、返ってきた答えは的確であり、誠実であり、しかも心に刺さるものだった。

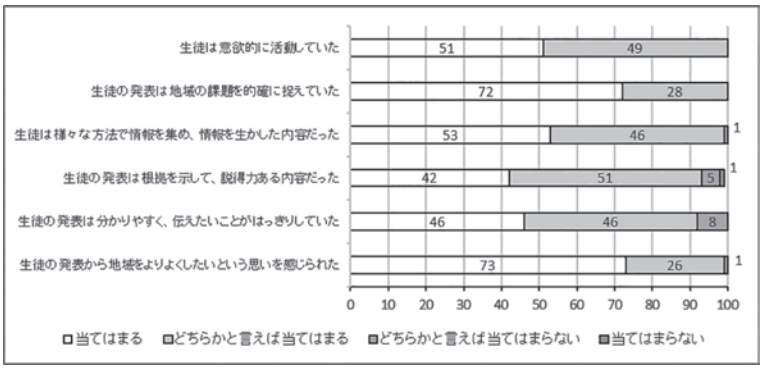
「実際に売るとなると難しいかもね。私たちには人生がかかっているから。」

確かに、いざ改良したみそまんを売ったとしても、それが売れるということは、私たちには保障出来ない。今まで私たちは、売れればいいと思っていた。しかし、今私たちが、やろうとしていることは町全体に関わっている。「町をさらに良くしたい」「役に立ちたい」そんな初心を忘れないことが大事だと学んだ。

私たちの世代は、「これからの未来を創っていく人になれ」とよく言われる。未来へと向かうのではなく、「創る」だ。この活動は、ほんの少しの効果しかないのかもしれない。それでも今、私たちの住む細江町のために出来ることは最後までやり通したい。

未来を創るために。

資料21　生徒の振り返り



資料22　保護者・地域アンケート結果

・細江町が大好き!!だからこそ、今私達が出来る事は何か、子供達なりに考えていると思いました。具体例も考え、絵や図を使い分かりやすかったです。今、実現しなくてもこの気持ちを下の学年の子にも受けついで欲しいと熱い細江愛を感じました。私も協力したい、頑張ってほしいと素直に思える、説得力のある、心のこもった発表でした。
・SDGｓの観点からは「課題解決」ということはほぼイコールと考えられます。しかし、なかなかつながりがわからないという現状もまだあります。その中で地域をみつめてその課題を発掘していく、そして持続的な成長を視野に解決策を考えていくということをつかんでいるのは素晴らしいと思いました。プレゼンテーションを2件聞かせていただきましたが、いずれも地域課題をとらえ、地域への愛着につつまれた良いものであったと思います。
・中学生らしい観点で商店街の活性化について具体的に複数案考えをまとめてあり、実現像を想像しやすく、大変良かったです。今回の発表にとどまらず、ぜひ実現に向けて今後も継続して細江町がよりよくなるために若い力を注ぎ地域に関わってほしいと思います。

資料23　保護者・地域アンケートの自由記述

保護者や地域からも全体的に高い評価であった。今回の活動が地域課題をテーマとしたことで、地域の方や保護者との接点がもてた。生徒たちの探究内容が、この地域の住民としても関心のある内容であったと思われる。

さらに、数値的には高いものの、根拠を示した説得力のある発表内容とするための「整理・分析」や相手に分かりやすく伝える「まとめ・表現」に一層取り組む必要がある。また、自由記述からも中学生が地域課題に取り組むことで、地域への愛着をもち、将来の地域の担い手への期待が大きいことが分かる。

(4) 地域への広報

学校が、社会との連携及び協働の実現を図るためには、学校を理解してもらうことが欠かせない。行政や経済界、大学、地域など連携先が多岐にわたるほど、学校の考えや取組を分かりやすく伝え、説明していく必要がある。そこで、広報のための資料を作成し活用することで、地域との連携・協働体制づくりが進んできている（資料24、25）。

資料24　地域への広報だより

資料25　３年間の体系的なプログラム

(5) 今後の課題

私たち教師に求められることとして、次の3点を考えた。

① 総合的な学習の時間における探究的な学習の質を高めるためにも、各教科等の見方・考え方を働かせて活用する教科等横断的な学習に向かうカリキュラム・マネジメントの一層の充実を図る。

② 課題解決型の探究的な学習の充実を図るため、生徒の実態把握のうえで、一連の探究プロセスの中でも「整理・分析」、「まとめ・表現」に対するさらなる取組が必要である。

③ 社会に開かれた教育課程の実現に向け、学校と社会との連携及び協働の体制づくりを確かなものにする。

7 終わりに

地域への愛着をもつ人材を育てることで持続可能な地域社会を創ることにつながる。つまり、「魅力ある人づくり」こそが「魅力ある地域づくり」と考えている。そのために、生徒にこんな資質・能力を育むという思いを、生徒、教職員、保護者、地域と共有して、今後も次代を担い、創っていく生徒に必要な資質・能力の育成に努めていきたい。

【参考文献】

合田哲雄「学習指導要領の読み方・活かし方」教育開発研究所、2019